

原著論文

栄養士養成校の学生の SDGs に対する認識と 取り組み実態について

The actual state of recognition in and approach to the SDGs
among junior college students for training dietitian

小河原 佳子
Yoshiko Kogawara

Abstract

本研究は栄養士養成校の学生の SDGs について認識と取り組み実態を把握する目的で調査した。調査時期は 2022 年 7 月に 2 回、自記式のアンケートを実施した。結果は以下の通りである。

ほとんどの学生が SDGs を知っていたが、意味の理解ができていない学生が 6 割いた。

1 回目の調査で「1. 貧困をなくそう」「5. ジェンダー平等を実現しよう」「2. 飢餓をゼロに」は認知度が高く、7 割近くの学生が知っていた。

学生に SDGs の 17 の目標で気になる取り組みを選択させた結果、「5. ジェンダー平等を実現しよう」「2. 飢餓をゼロに」「14. 海の豊かさを守ろう」の順に多かった。

学生自身が取り組んでいる SDGs の 17 の目標中で 1 番多いのは「7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに」が 10 人で、次いで「2. 飢餓をゼロに」「14. 海の豊かさを守ろう」が 9 人だった。

1 回目のアンケート後に授業で SDGs の取り組みを紹介し、自分でできる取り組みを考えてもらった後、12 人がエネルギー問題として省エネルギー対策を取り組み始めた。また、フードロス対策として食べ残しや消費期限、賞味期限を気にするようになった学生は 6 人だった。

キーワード： SDGs、栄養士養成校、認識、取り組み

The purpose of the survey was to determine the actual level of recognition and approach to the SDGs among junior college students for training dietitians. The survey was conducted twice in July 2022, using a self-administered questionnaire.

The results are as follows.

Most students were aware of the SDGs, but 60% of the students did not understand their meaning.

In the first survey, among the SDGs, many students were familiar with "1. No Poverty," "5. Gender Equality," and "2. Zero Hunger," with nearly 70% of the students knowing about these items.

When students were asked to select the initiatives, they cared about among the 17 goals of the SDGs, the most common responses were "5 Gender Equality" and "2 Zero hunger" followed by "14 Life Below Water Protect".

Of the 17 SDGs that the students themselves are working on, the most common was "7. Affordable and Clean Energy" (10 students), followed by "2. Zero hunger" (9 students) and "14. Life Below Water Protect".

After the first survey, we introduced the SDGs initiatives in class and asked the students to think about the initiatives they could take on their own, and then asked them to name the initiatives they had started. 12 students started working on energy conservation measures as an energy problem. In addition, 6 students began to pay attention to leftovers, expiration dates, and best-before dates as food loss countermeasures.

Key words : SDGs, junior college students for training dietitians, recognition, approach

I はじめに

2015 年国連総会で全ての国で人類を貧困の恐怖

や欠乏の恐怖から解放し地球を癒し安全にするため

に持続可能な開発目標 (SDGs) を採択し、2030 年

までに目標を達成するために行動を促進している。SDGsの目標達成のために17の目標と169のターゲット¹⁾が掲げられた。

日本政府は国として各省庁で具体的な取り組み案²⁾が計画されている。また、企業も積極的にこれらの取り組み³⁾を推進し進めている。2021年に東京で行われた夏季オリンピックでもこのSDGsに配慮した運営計画⁴⁾が策定され開催された。たとえば、調達する物資は持続可能性を考慮し個別基準に合わせたり、食品ロス削減や容器包装廃棄物削減を図ったり様々な工夫がなされた。この社会の流れの中で、研究教育機関である大学では、各々の特徴を活かしたSDGsの取り組み⁵⁾を行なっている。短期大学においても貢献できる領域があり取り組んでいる。また栄養士として社会で働くときに、学生自身もSDGsの取り組みに関わり、率先してSDGsを活かした教育に取り組み、対象者を教育していく立場になる。その為に将来、栄養士として活躍する学生にもSDGsやカーボンニュートラルの取り組みに対する認識をもち、日常生活の中でSDGsに積極的に関心を持って取り組むことが望まれる。栄養士養成校の学生にもSDGsに関わっていくために教育が必要であり、学生の推進力を高めるためにSDGsに考慮した授業を実施する必要がある。その為の基礎資料として、本学の学生のSDGsに対する関心度や取り組み姿勢の実態を把握する必要がある。今回は、学生のSDGsに対する認識や取り組みの実態を把握することを目的としてSDGsに関するアンケート調査を行った。

II 方法

1. 対象者

栄養士養成校に通う短期大学2年生59名に対して行った。1回目のアンケートは有効回答者数45人(7月4日実施分 回収率76.3%)、2回目のアンケートは有効回答者数46人(7月25日位分 回収率78.0%)について分析した。

2. 調査日時

2022年7月4日、25日栄養指導論2の授業中に自記式のアンケートを実施した。1回目は7月4日に認識についてのアンケート調査を実施した。2回目は、7月11日に授業でSDGsについて講義をし、

7月25日に取り組み実態アンケートを実施した。

III 結果

1. SDGsの授業前の認識について

「SDGsを知っていますか」の問いに対して約89%の学生が知っていると言った。

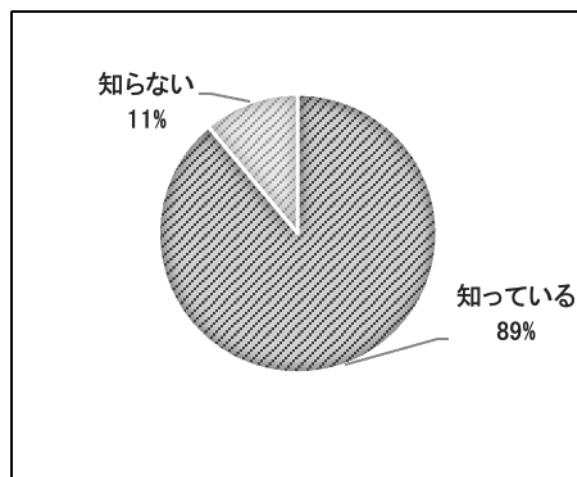


図1 SDGsを知っている学生の人数(割合)

SDGsを日本語になおす問いには42%の学生は正しく日本語訳ができていたが、訳が曖昧だったり、日本語訳ができていなかったりした学生は未記入を含め、6割近くいた。

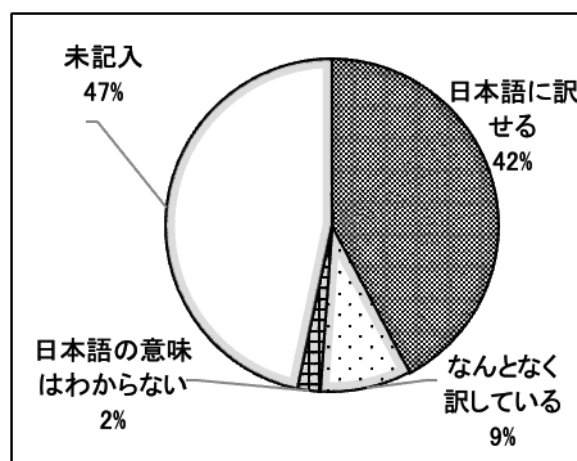


図2 SDGsを日本語に訳すことのできる学生の人数(割合)

SDGsの17の目標の中で学生が知っている取り組みの番号を選択させたところ、「1. 貧困をなくそう」「5. ジェンダー平等を実現しよう」「2. 飢餓をゼロに」が多く、7割近くの学生が知っていた。中

には1~17まで全て選択した学生が7人いた。

1. 貧困をなくそう
2. 飢餓をゼロに
3. すべての人に健康と福祉を
4. 質の高い教育をみんなに
5. ジェンダー平等を実現しよう
6. 安全な水とトイレを世界中に
7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに
8. 働きがいも経済成長も
9. 産業と技術革新の基盤をつくろう
10. 人や国の不平等をなくそう
11. 住み続けられるまちづくりを
12. つくる責任 つかう責任
13. 気候変動に具体的な対策を
14. 海の豊かさを守ろう
15. 陸の豊かさも守ろう
16. 平和と公平をすべての人に
17. パートナリシップで目標を達成しよう

図3 SDGsの17の目標

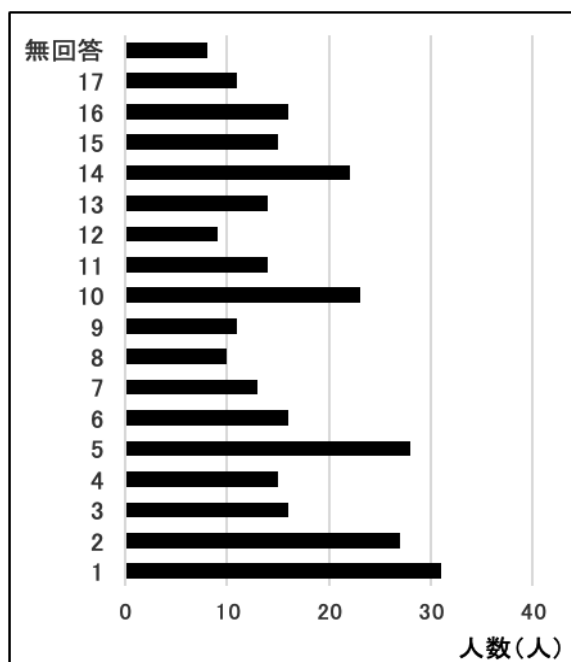


図4 SDGsの17の目標別学生の周知人数

学生にSDGsの17の目標で気になる取り組みを選択させた結果、「5. ジェンダー平等を実現しよう」「2. 飢餓をゼロに」について「14. 海の豊かさを守ろう」の順に多かった。

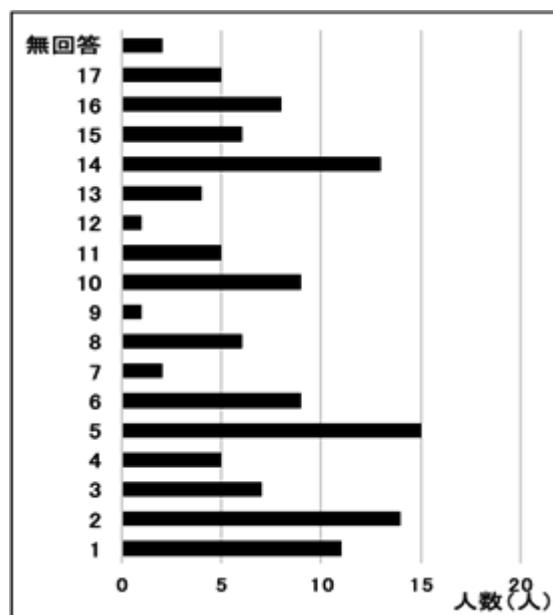


図5 学生が気になるSDGsの17の目標

学生が知っている取り組み例を自由表記させた結果19人が記入した。一番多かった取り組み内容は「プラスチックストローを他素材に変更した取り組み」が4人、次いで「ジェンダー平等」が3人だった。他に「エコバッグ・マイボトル」「食品ロス」「ポイ捨て」「子どもの貧困」「エネルギー問題」「水の節約」「植林」などであった。

学生が取り組みたいSDGsの目標をあげさせたところ、無回答の学生は13人いた。1番多い目標は「14. 海の豊かさを守ろう」で6人だった。次いで「5. ジェンダー平等を実現しよう」「7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに」が4人だった。

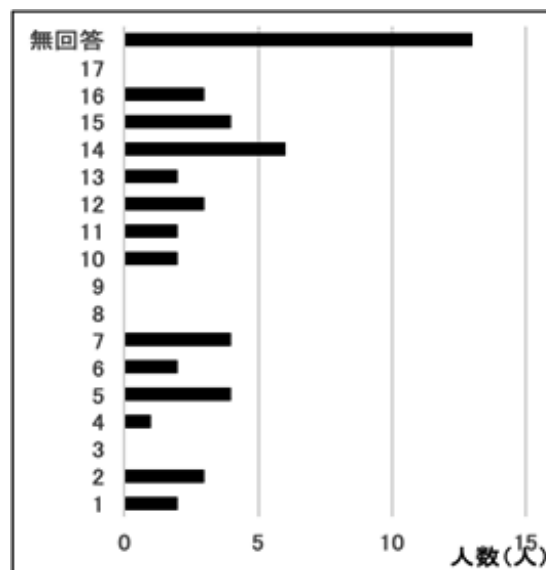


図6 学生が取り組みたいSDGsの17の目標

2. SDGs の授業後の取り組み状況について

学生自身が取り組んでいる SDGs の 17 の目標中 1 番多いのは「7. エネルギーをみんなに そしてクリーンに」が 10 人で、次いで「2. 飢餓をゼロに」「14. 海の豊かさを守ろう」が 9 人だった。

しかしながら、「特になし」や無回答が 6 人ずついた。

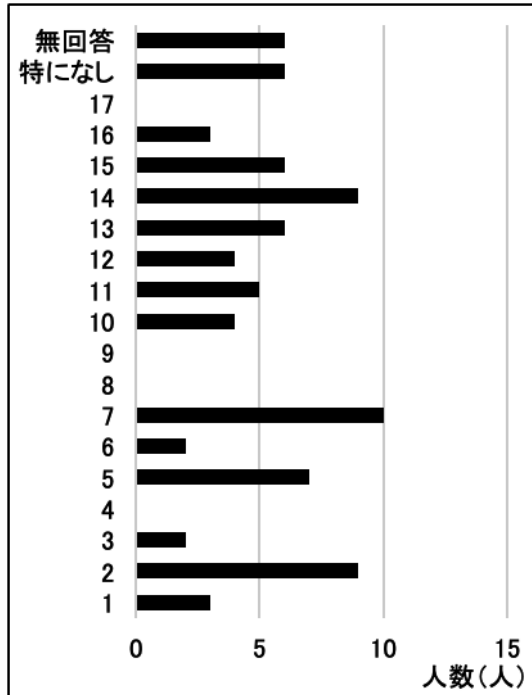


図7 学生が取り組んでいる SDGs の 17 の目標

1 回目のアンケート後に授業で SDGs の取り組みを紹介し、自分でできる取り組みを考えてもらった後、始めた取り組みをあげてもらった。2 回とも回答した学生のうち 12 人がエネルギー問題として省エネルギー対策を取り組み始めた。また、フードロス対策として食べ残しや消費期限、賞味期限を気にするようになった学生は 6 人だった。エコバッグ、マイボトルの取り組みを始めた学生は 5 人だった。「特になし」と答えた学生は 5 人だった。

今回の授業後に取り組みに対して実施した学生の感想では「SDGs は考えればできることが多くあると思うので続けて世界が良くなるよう少しでも協力したいです。」「当たり前のようなことが SDGs にもなることが改めてわかった。今後も続けていきたいです。」「少しのことで変わることがあるので、これからも取り組んでいきたいです。」など SDGs の取り組みに関心を持ち、継続していこうとする姿勢が

見られた。また実践したことにより「電気代が浮いた。優しい気分になれた。」「いつもより暑く感じたけれど、少しずつ少しずつ変えていくだけで、電気代も変わるし地球にも優しい」「とても気持ちが良く感じた」などのメリットと優しさを感じた学生もいた。「スーパーなどに行くとつい買いすぎてしまい食べ残ってしまいがちだったので、食べ切れる量だけ買うことに意識して取り組みました。初めは考えながら取り組んでいましたが、慣れてくると自然に適量を選ぶことができるようになりました。今後も継続していきたいです。」「節電したことで無駄に電気を使うことがなかったので、電気代の節約にもなりました。」など日常生活の見直しになった学生もいた。

IV 考察

SDGs の名称は新聞紙、TV、インターネットなどで広く学生に伝わり、9 割の学生が知っていると答えていたが、SDGs の取り組みの具体的な内容までになると実際には理解していない学生が多かった。多くの学生が知っていると答えた目標「1. 貧困をなくそう」「2. 飢餓をゼロに」は、具体的な取り組み例としてあげられたのは「子どもの貧困」で数名あげたにとどまった。「SDGs」という言葉だけがひとり歩きしている実態となった。現状では、理論や政策について理解していない。SDGs 活動の具体的な活動を知っているかを見てみると「5. ジェンダー平等を実現しよう」「2. 飢餓をゼロに」は、関心を持っている学生が多かった。ニュースや SNS での発信が多く見られた時期との関連も考えられ、学生世代に認知が高かったと推測できる。「5. ジェンダー平等を実現しよう」「2. 飢餓をゼロに」に次いで「14. 海の豊かさを守ろう」は気になる目標として関心度が高く、特に「14. 海の豊かさを守ろう」と直接結びついてはいなかったが、プラスチック製品を少なくするための活動である「エコバッグ」「マイボトル」「ストロー」「使い捨てフォーク・スプーン」について積極的に実践している学生が目立った。また、授業中に自分でできる取り組みを考えてもらった後、始めた取り組みとして「エコバッグ」「マイボトル」をあげた学生が 5 人ほどいた。活動が広まり、また実践しやすさがこの結果に繋がったと考えられる。食や栄養、健康を教育していく立ち位置になる

栄養士として、職場で実践しやすく、SDGs の取り組みになるため、授業で、焦点を絞って栄養教育と結びつけられる取り組みとしてもあげられる項目ではないかと考えられる。また、「食べ残し」「消費期限」「賞味期限」に気をつけるようになった学生も複数人いた。

実際に SDGs を授業で学んだ後、学生自身が関心を持ち、取り組み始めたものに「節電」や「フードロス」「エコバッグ」「マイボトル」などが多く、取り組みのきっかけがあれば、学生も積極的に取り組むことができたようだった。また栄養士の教育課程として学んできたことと結びつきやすい目標は積極的に取り組んでいるようだった。特に「フードロス」は取り組みやすい傾向が伺えた。横山らの研究⁵⁾でも栄養士養成課程の学生はフードロスの関心が高いとの報告があった。

2 回目のアンケート結果で、授業後に SDGs の目標の取り組み始めたことに対して「特になし」「無回答」だった学生も、すでに取り組んでいる目標が複数あったり、項目に分類できずに活動内容を感想としてあげたりしていたため、学生の SDGs に対する関心度や取り組み度としては高い傾向だったと推測できる。SDGs の取り組みに関心があっても具体的な取り組みを理解できていなかったり、きっかけがなかったために取り組めていなかったりした学生が授業で「できることを始めてみよう」と促した結果、ほとんどの学生が、他の学生が取り組んでいることや社会の取り組みを知ることで自分でもできると自信を持って取り組み始めたようだった。その結果、学生からの感想で「社会に役立つこと」と「自分の生活でもメリットを感じたこと」でより継続する意思を示した学生が多かった。

今までの取り組み以外でも日常生活でできることに気づき、積極的に取り組む姿勢を示した学生が増えた。今回は学生の自主性に任せ、各自での取り組みを始めた段階の報告だが、将来、指導者を育成する上でも、短期大学として地域貢献の取り組みとしても、甲斐荘⁶⁾が示すような高等教育機関として全体の目標やプログラムを計画し、実施していく必要があると考える。

今回の SDGs について学生の認識と授業後の取り組み実態について調査の結果から、学生の SDGs に

ついての認識は不足しているため、SDGs の目標・目的をしっかりと理解する初期の取り組みが必要である。荒井⁷⁾のようにグループ学習と講義を組み合わせたプログラムによって、SDGs を認識させ、それに伴う行動を自ら起こす、または指導することに繋がると推察する。継続して授業でのプログラムを検討していきたい。

【参考文献】

- 1) 外務省 持続可能な開発のための 2030 アジェンダ (日本語訳)
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000101402.pdf> 2022 年 9 月 7 日閲覧
- 2) 外務省 JAPAN SDGs Action Platform
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/effort/index.html> 2022 年 9 月 7 日閲覧
- 3) 東京 2020×持続可能性東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
<https://www.env.go.jp/content/900496790.pdf> 2022 年 9 月 6 日閲覧
- 4) 森口祐一, 東京オリンピック・パラリンピック 2020 大会における持続可能性への配慮: 日本 LCA 学会誌 16 巻 1 号 p. 2-6 2020
- 5) 横山恵, 佐藤佳織, 菅原百合: 短期大学生を対象とした食品ロスの実態および意識に関する調査, 修紅短期大学紀要 第 41 号 p.43-49 2021
- 6) 甲斐荘正晃, 短期大学における SDGs 取り組みの方向性について: 大妻女子大学家政系研究紀要 第 57 号 p.107-111 2021
- 7) 荒井義則, 環境教育と SDGs に関する一考察: 埼玉女子短期大学紀要 第 41 号 p.13-26 2020